

実践研究

## 国語科 実践研究部

研究主題

令和の日本型学校教育

子供が必然性をもって取り組む国語の授業づくり

中央小学校

田端 未樹（リーダー）

若狭小学校

藤原沙也可

上新井小学校

前田 有香

担当指導主事

森谷 慎平

# 令和の日本型学校教育 ～子供が必然性をもって取り組む国語の授業づくり

## 主題設定の理由 国語に対する児童の思い

達成感が味わいにくい

系統性が感じにくい

受動的な学習

単元のゴールが不明確。学びの見通しも持てない。  
日常生活に結びついた生きる知識の習得に至っていない。  
教師の発問にこたえる一問一答の授業展開



↳ 「主体的・対話的で深い学び」は実現できない

一人一人が必然性をもって学習に取り組むことが不可欠

仮説1 単元のゴール及び、学習の進め方が明確になると、  
必然性をもって学習に取り組むことができるだろう。

仮説2 学びを調整できる環境が整うと、  
必然性をもって学習に取り組むことができるだろう。

仮説3 教師が教材研究を綿密に行うことで、  
必然性をもって学習に取り組むことができるだろう。



## 仮説に対する手立て

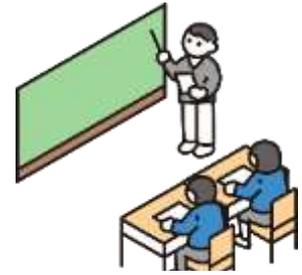
### 【学習過程において】

- 導入時に、見通しをもたせる時間の設定
- 学習形態の選択
- 自分の考えを表現する方法の選択
- 困り感が生じた際の「助けとなる環境」の設定



## 【学習環境において】

- 単元のゴール、学習計画等の掲示
- 学習に関連する言語環境の設定  
(関連書籍コーナーの設置、関連語彙の掲示等)
- 既習事項を踏まえた、系統的な指導や支援



## 【教材研究において】

- 相手意識、目的意識をもてるような単元のゴールの工夫
- 児童へ適切な声かけを行うため、指導事項、系統性の明確化
- 個別の支援に生かすため、児童と同じ活動の実践



## 具体的な取り組み(授業実践より)

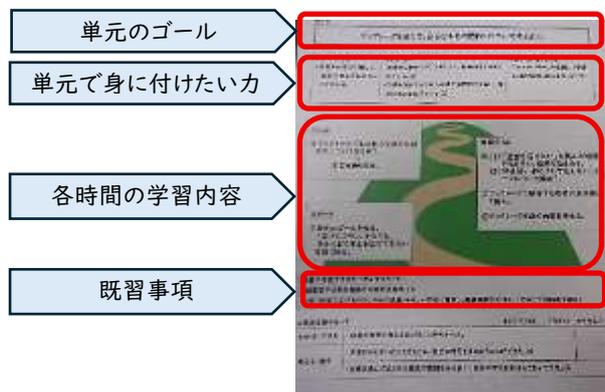
### 【学習過程において】

#### ① 見通しをもたせる時間の設定

- 児童と一緒に学習計画を立てる。

(ラーニングマウンテンの作成)

※ラーニングマウンテン：大妻女子大学 樺山敏郎教授 考案



- 毎時間の学習で、学習方法(どの形態で学習をするのか。どのワークシートを使うのか。等)を選択する時間を設定する。

#### ② 学習形態の選択

##### 【学習形態の種類】

- 個人で取り組む。
- ペアまたはグループで取り組む。
- 教師と一緒に取り組む。



個人



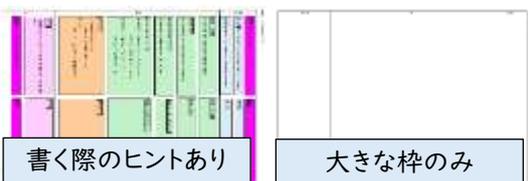
ペア



グループ

#### ③ 自分の考えを表現する方法の選択

- ワークシートの選択



書く際のヒントあり

大きな枠のみ

#### ④ 困り感を感じた際、助けとなる環境の設定

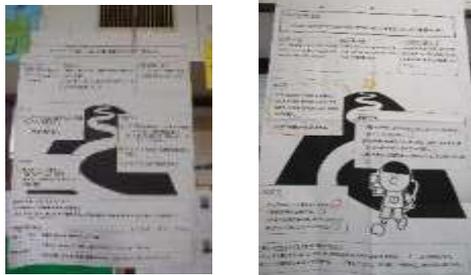
- ヒントカードの用意
- 友達や教師に相談できる環境
- 学習方法やテーマ等を変更できる環境



## 【学習環境において】

### ①単元のゴール、学習計画等の掲示

- 第1時で作成したラーニングマウンテンの掲示



### ②学習に関する言語環境の設定

- 関連図書コーナーの設置

6の1書店

本の帯を作成



- 関連語彙の掲示

学習の核となる語の掲示



### ③既習事項を踏まえた系統的な指導や支援

- ラーニングマウンテンを作成する際、「前学年までに身に付いている力の中で、どの力を使って学習に取り組むのか」について考える時間を設定し、児童自身が系統性を意識して学習に取り組むことができるようにする。
- 前年度までの指導事項がどの程度身に付いているのかを把握し、児童の実態に応じた支援を行う。

## 【教材研究において】

### ①相手意識、目的意識をもてるような

単元のゴールの工夫

	相手	目的
実践1	外国に住んでいる人	日本の魅力を伝える解説文を書く
実践2	クラスの仲間	本の魅力を伝える
実践3	1年生	おもちゃ図鑑を作る
実践4	クラスの仲間	説得力のある意見文集を作る

### ②児童へ適切な声かけを行うため、

指導事項、系統性の明確化

- 学習指導要領に記載されている指導事項及び達成した姿を教師が具体的にイメージする。
- 国語科の学習用語を正しく把握する。(思考に関する語とは。推敲とは。など)
- 前学年の指導事項との違いを明確に把握する。

### ③ 個別の支援に生かすため、児童と同じ活動の実践

例えば…

- 児童と同じ条件で、構成を考えたり、文章を書いたりする。
- 児童と同じ条件で、核となる言葉探しをする。



### 成果

- 見通しをもたせる時間の設定・単元のゴール、学習計画等の掲示により、

相手や目的を意識した声：「この表現では、1年生に伝わりにくい。」

時間の見通しを意識した声：「次の時間は、読み合いだから、少し急がなければ。」

→ 主体的に学習に取り組む姿

- 学習形態、考えを表す手段を選択させることにより、

「次は、1人で挑戦しよう。」

「やはり、ヒントありのワークシートに変えてもいいですか。」

→ 学びを自己調整する児童の姿

- 困り感が生じた際の「助けとなる環境」を設定することにより、

「ヒントを参考に、自分の力で進めることができた。」

→ 自信をもって課題に取り組む児童の姿

- 学習に関する言語環境を設定することにより、

授業時間外に関連図書を手にする児童、作文をする際に掲示物を手掛かりとする児童が増加。

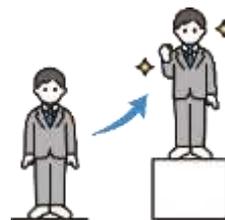
→ 学習に対する関心の高まり

- 個別の支援に生かすため、教材研究の段階で児童と同じ言語活動を実践することにより、児童に合ったヒントカードの作成が作成でき、躓きポイントを見据えた個別の指導ができた。

→ 主体的に学習に取り組むための土台作り



A 学級では、「文章を書いて友達に説明することは好きですか」という問いに対して、「はい」「どちらかといえば、はい」と答えた児童の割合が53% → 84% となった。



### 課題

- 学習形態、考えを表す手段の選択

少数だが、自分に合った学習形態や考えを表す手段を選択できない児童も見られ

→ た。適切に選択できない理由を分析し、その児童に合った個別の支援を行うことでより必要感のある学習になると考えられる。

- 相手意識、目的意識をもてるような単元のゴールの工夫

相手意識、目的意識が児童にとってイメージしやすいほど、必要感をもって学習に取り

→ 組んでいた。「何ができるようになるか。」ということはもちろん、児童の興味関心等にも目を向けることで、より必要感のある学習になると考えられる。

### 最後に

国語科は、他の教科はもちろん日常生活とも深く結びついている教科である。児童の未来が豊かなものとなるよう、これからも「やってみたい!」「自分にぴったりの方法は何だろう?」「できた!」と**必要感をもって取り組み、達成感を味わえるような国語科の学習**を行っていく。